

# 小笠原村立小笠原小学校令和5年度授業改善推進プラン

小笠原村小笠原小学校  
校長 横山 優美

## (1) 令和4年度の取り組みに関する総括

村学力調査の令和4年度から令和5年度の学年ごとの教科全体平均正答率の推移を見ると、全体として横ばいであるが、日頃の成果が見られて良好な学年と課題が残る学年との差が顕著に表れている。また、校内と全国のR5平均正答率を比較すると、国語・算数は全国平均とほぼ同程度の数値であるが、社会・理科は、全国平均を大きく下回る結果となった。

### ①村学力調査の概要

時期	対象学年	教科等	
5月	2～6年	2・3年 国・算 4～6年 国・社・算・理	3～6年 学習・生活に関する意識調査

### ②村学力調査結果

教科全体の平均正答率(%)について ※( )内は、全国の平均正答率との差

	国語	算数	社会	理科
2年 R4	79.8 (+0.3)	78.1 (+0.1)		
R5	83.6 (+6.7)	86.9 (+4.0)		
3年 R4	67.2 (+0.1)	73.8 (-0.1)		
R5	76.0 (+3.5)	70.2 (-4.2)		
4年 R4	70.7 (+2.7)	57.5 (-10.8)	78.0 (+4.9)	69.1 (-16.6)
R5	65.2 (-5.6)	67.2 (-4.7)	53.9 (-14.1)	56.7 (-6.3)
5年 R4	71.7 (+3.7)	72.1 (+3.8)	68.3 (+7.9)	69.1 (+5.9)
R5	70.4 (+0.4)	69.1 (+2.0)	57.9 (+0.9)	66.8 (±0)
6年 R4	53.7 (-8.3)	58.1 (-11.4)	54.5 (-9.0)	56.1 (-12.1)
R5	72.6 (+3.6)	65.2 (+0.6)	64.1 (-1.3)	59.7 (-1.4)

R4…令和4年度調査結果 R5…令和5年度調査結果

## (2) 授業改善のための取り組みについて

R5年度全国平均を下回った学年の教科の内容について整理すると以下のようになる。

〈算数〉	基礎	活用	知識	思考	態度
3年	75.6 (-4.7)	51.0 (-3.3)	73.6 (-4.6)	55.6 (-3.5)	68.1 (+0.2)
4年	70.4 (-5.6)	57.6 (-1.9)	71.8 (-4.7)	50.8 (-4.3)	66.7 (-7.8)
〈社会〉	基礎	活用	知識	思考	態度
4年	58.2 (-9.8)	43.8 (-24.1)	57.5 (-3.1)	47.8 (-15.8)	43.8 (-24.1)
6年	66.7 (-0.6)	56.5 (-3.1)	63.6 (-1.2)	65.2 (-1.5)	56.5 (-3.1)
〈理科〉	基礎	活用	知識	思考	態度
4年	61.6 (-6.6)	43.1 (-5.5)	62.7 (-6.5)	47.7 (-5.9)	38.9 (+0.9)
6年	64.3 (-2.8)	49.0 (+0.8)	62.4 (-4.7)	57.0 (+1.8)	72.7 (+14.0)

## 課題①：基礎・活用について

### ◎算数（第2学年から第6学年まで実施）

前学年までの学習内容の定着が不十分で、単純な四則計算が確実に身に付いていない児童がいる。また、活用面では文章問題や具体的な生活場面に置き換えた問題などに課題がある。

### ◎社会（第4学年から第6学年まで実施）

第6学年では、世界の中の国土の問題について、日本の領土の範囲や世界の国旗について間違いが多くあった。第5学年では、安全な暮らし（事件や事故）の問題で、子ども110番の家や警察の交通事故現場で行う仕事についての理解が不十分である。

### ◎理科（第4学年から第6学年まで実施）

第4学年のじしゃくの性質・物の重さに関する問題で、じしゃくの性質や物の重さを比べる実験について間違いが多くあった。

これらの課題を解決していくためには、個に応じた指導ができるよう教材の工夫が必要である。またスキルタイムにより、学年ごとの学習内容の確実な定着を図ること、ベーシックドリルによる個々のつまづきを把握し、日々の指導に当たることが必要と考える。

## 課題②：知識・思考について

### ◎算数（第2学年から第6学年まで実施）

公式や数のきまりについての理解や作図の技能が不十分である。

解決のために、具体例や生活場面を想定して問題に取り組めるようにしたり、長期的に問題を反復したりして身に付けさせる指導を行っていく。

### ◎社会（第4学年から第6学年まで実施）

資料の読み取りや結果を受けての考察などが苦手である。

社会科見学など実感を伴った授業に取り組み、問題解決的な学習をさらに推進していくことが必要と考える。

### ◎理科（第4学年から第6学年まで実施）

グラフなどの資料をもとに推測する、実験結果を根拠として説明することが苦手である。

予想や仮設をもとに実験方法を考え、できるだけ児童の言葉から意見を引き出ししていく授業展開をしていく。実験などを伴った授業に取り組んだり、視覚教材を意図的に活用したりし、問題解決的な学習をさらに推進していくことが必要と考える。

## ②学校全体での取り組み

児童が「わかる」から「できる」を体感する授業を実践していくために、学校全体で「指導と評価の一体化」を図り、児童の実情に応じた授業改善に取り組んでいく。基礎的・基本的な知識・技能の習得、課題を解決するための思考力・判断力・表現力を育むとともに、課題解決の過程を大切にし、児童の主体性を高める指導の工夫をする。また、ICT機器を活用し「個別最適な学び」「協働的な学び」を充実させる。

さらに、小中一貫教育を充実させるために、小・中学校の学習内容を確認し、9年間の学びの系統性を意識した授業改善推進プランを作成する。